

教宣 せぶん

「裁判」へ行こう

本日も私たちとの団交の内容がレターで配信されました。相変わらず、会社は、自分たちに都合のいいように文章をまとめ、私たちが困ってすがってきているというムードを作り出しています。あのレターからは、団交の席上、私たちの質しに経営側がどんな表情を浮かべて答えているか、私たちの主張をどのような顔をして聞いているか、うかがい知ることはできません。いっそ団交の様子を衛星放送でも流してもらいたいものです。きっとレターからは想像もつかない、会社側の「表情」が映し出されるはず。あのレターに団交の「真相」「臨場感」を求めるのは、太陽が西から昇るくらいありえない、無理な話です。そういう感性をもって、あの手のレターを読みましょう

さて、レターの最後には決まってある文章が載っています。「課所長は支部組合員には転身支援金に関わる話しは一切しないように」というお決まりの文章です。通常、文章を書く時には筆者の一番言いたいこと、すなわち「まとめ」を最後にもってきます。読者に印象づけるために、もっとも効果的だからです。この手のレターの最後に、判で押したように「課所長は支部組合員には転身支援金に関わる話しは一切しないように」という文章が書かれているということは、ここが筆者の一番言いたいことのはずです。それも馬鹿のひとつ覚え的に執拗に書いてくることを見ると、そこに筆者の底知れない執念さえ感じてしまいます。

では「誰に」対するメッセージなのでしょう？

「課所長」でしょうか？いいえ違います。会社の指示に従順に動く課所長にそこまで指示を徹底する必要がありません。では「提訴団」でしょうか？いいえ違います。「定年まで働かせろ」と提訴している者が代理店への転進支援金の話しなど聞きたい理由がありません。では「誰に」でしょうか？そうです、提訴していない支部組合員にむけた、「脅し」とも言えるメッセージなのです。「全損保にいたのでは支援金がもらえない」ことを、何度も何度も強調しているのです。ひょっとしたら、団交の内容を伝えるなどということは、実はどうでも良く、このメッセージを合法的に伝えたいがために、あの手のレターを出して

いるのではないのでしょうか。そして、私たちの団結を削ぎ、提訴団を孤立させ、「裁判」に持ち込ませないというのが会社の狙いのはずです。もしほとんどの者が提訴団に入ったとしたら、メッセージの対象者がいなくなるので、レターの最後の文章は掲載されないと预言します。

「都労委」をも無視する姿勢を見せる東海経営が、団交で態度を改めるはずもありません。すでに法によって白黒をハッキリさせるしか道はないように思います。そうすることが会社に「淡い期待を持たせない」「下手な技術を使わせない」ことにもなりますし、何よりもこの一件の、最高の、最速の解決策だと断言します。さあ、みんなで「裁判」に行きましょう。